

「地域づくり円陣」出前プロジェクト
～復興した能登の元気を東日本へ～

報告書

岩手県陸前高田市横田地区
2011年9月30日～10月2日

石川地域づくり協会

「地域づくり円陣」出前プロジェクト

～復興した能登の元気を東日本へ～

1、開催目的

能登半島地震の復興支援として沖地ネットから心温まる支援金をいただき、協会として「能登の復興」を掲げた地域づくり円陣を開催し、着実に復興の道を歩んでいる。一方、東日本での震災は壊滅的で、復興には長い年月が必要とされる。石川型の地域づくりシンポジウム「地域づくり円陣」を被災地へ出前として持ち込み、「石川地域づくり塾プログラム」と合わせて復興のシクミづくりについて研究を深める。また、能登の復興の歩みや能登の元気を被災地へ伝えることで、復興の一助にすることを目的に開催する。なお、持ち込む大鍋は炊き出しではなく、能登の元気を伝えるツールとして位置付ける。

2、研究課題

「能登と東北を継続的に繋ぐ人と物が交流できるシカケづくり」

出前プロジェクトが一過性に終わらないために、能登と東北との間で継続的に人と物が交流できるシクミとシカケについての可能性、実現性について研究を深める。

3、主催 石川地域づくり協会

4、協力 遠野山里ネット、まごころネット 菊池新一氏 日本航空学園石川

5、研修及び訪問先

岩手県遠野市「遠野山里ネット」及び「まごころネット」

岩手県陸前高田市横田コミュニティセンター

6、対象者 堂の沢、三日市、狩集の仮設住宅被災者、横田地区住民 250人

7、大鍋等

大鍋300人前(すり身10kg、野菜・豆腐・こんにゃくは現地で購入)

輪島塗り箸200本(どんぶりの箸として使い、土産として渡す)

沖縄県の食材(もずく、シークァワーサー、ちんすこは土産として渡す)

石川の酒、沖縄の酒(現地の了解が得られなかったので菊池氏に託す)

8、日程 別紙の通り

9、移動手段 日本航空学園石川バス及びトラック(先生4名)

10、参加者

コーディネーター：赤須治郎、濱博一 運営委員：大湯章吉、高名雅弘

塾生：山口雅史、木村孔明 事務局：中本利光、臼井晴基、山本一彦

11、役割分担

- ・総括 赤須治郎コーディネーター
- ・総括補佐 中本利光 協会事務局長(石川県地域振興課長)
- ・現地研修担当 濱博一コーディネーター
- ・サポーター 大湯章吉運営委員
- ・大鍋調達手配 高名雅弘運営委員
- ・庶務 臼井晴基、山本一彦(石川県地域振興課)

日 程 表

月 日	時 間	プログラム等	備 考	合流者
9月30日 (金)	17:00	奥能登総合事務所	テント、机、椅子 積み込み	航空学園石川 バス、トラック
	18:30	中能登町カルチャー センター飛翔	大鍋、食材、等の 積み込み	濱、大湯、高名
	21:20	(石川県庁発)	資材積み込み	赤須、中本、白 井、山本、木村、 山口
		(金沢東IC)	北陸自動車道	
		(新潟中央JCT)	磐越自動車道	
10月1日 (土)		(郡山JCT)	東北自動車道	
		(花巻JCT)	釜石自動車道	
		(東和IC)		
	9:00	(遠野市着) 遠野市東館町6-16 産業振興会館	遠野山里ネット	本多氏(まごころ ネット)と合 流
		産直でカット野菜 購入		インターン生1 名同行
	9:57	(陸前高田市横田 地区着)	横田コミュニテ ィーセンター	
		大鍋づくり		
	12:00	大鍋振る舞い、交 流		
	14:00	出前「地域づくり 円陣」		菊池新一氏と合 流
	15:00	被災地現場視察 地元区長と懇談	陸前高田市中 心街	
	17:40	(遠野市着) 菊池新一氏と懇談	遠野山里ネット 及びまごころネ ットの後方支援 活動を学ぶ	
	18:30	宿泊	民泊 3軒	
	10月2日 (日)	9:00	(遠野市発)	
		(東和IC)	釜石自動車道	
		(花巻JCT)	東北自動車道	
		(郡山JCT)	磐越自動車道	
		(新潟中央JCT)	北陸自動車道	
		(金沢東IC)		
18:47		(石川県庁着)		
19:48		中能登町カルチャー センター飛翔着		

決 算 書

収入

項 目	金 額 (円)
能登半島地震特別会計	281,500
地域づくり塾	224,077
合 計	505,577

支出

項 目	金 額 (円)	備 考
講師謝礼	93,000	赤須 C、濱 C、大湯委員
受け入れ現地謝金	50,000	遠野まごころネット
バス、ワゴン車燃料	67,475	
バス、トラック高速道路料金	0	車両証明により無料
バス、トラック運転謝金	80,000	日本航空学園(@20,000、2名、2台)
事務局経費	16,981	日当、封筒、石鹸
食材費(現地野菜)	32,248	カット代込
食材費	10,706	豆腐、料理酒、こんにゃくなど
魚すり身	6,300	
沖縄酒購入費	10,000	
ガス代	5,515	
食器等購入	8,352	お椀、コップ、たわし等
保険代	0	ボランティア保険加入
宿泊費(13人分)	65,000	@5,000
輪島塗箸代	60,000	
合 計	505,577	

総 括 報 告

赤 須 治 郎（総括コーディネーター）

多様な要件をひとつの事業に集約

地域づくり円陣出前プロジェクトはいくつかの要件を整理し、ひとつの事業を組み立て、実施したものである。

その要件を整理すると、「沖縄地域づくりネットワークから能登半島地震の際に当協会がいただいた支援金を有効に活用したい」と「地域づくりの仲間として、能登半島地震から復興した経験を東北の人たちに伝え、支援したい」のふたつに集約される。

事業スタッフを集めるために、当協会の「地域づくり塾」のカリキュラムに組み入れることで、塾生をスタッフとして確保することにした。また、震災復興ボランティアを塾生募集の「目玉」にすること、さらに、現地OJTによる地域づくりのスキル向上も狙った。

支援のスタイルとして「能登の大鍋」を選んだ。現地の人たちに支援内容が分かりやすく、参加しやすく、かつ、能登から来たことをアピールできると考えたからである。

事業のスタイルとして、石川型の地域づくりスタイルである「地域づくり円陣」を採用した。「円陣」の型を借りることで、大鍋を囲んで円陣ができ、食べながら語り合うシーンが浮かんできた。

順番に前後はあるが、このような経緯で出前プロジェクトが組み立てられた。これは誰かひとりの発想ではなく、運営委員会の議論から誕生したものである。当協会の企画力は目覚ましく向上していると言えよう。

多彩なメンバーのプロジェクトチーム

このプロジェクトチームは多彩（多才）なメンバーで構成され、それらが自らの役割を自覚し、それを実行したことで、「無事」に事業を遂行できた。

要になったのが事務局である。県職員としてのネットワークを活かしつつも、職務を越え、地域づくりの仲間の視点で縁の下の力持ちの役を担った。

スタッフにも県や市町の職員がいて、彼らも公務としてではなく、地域づくりの仲間として参加し、大鍋料理など、日頃の地域づくり活動の経験で、即戦力として活躍した。

円陣の人脈で現地受け入れを依頼

現地で受け入れ態勢をつくっていただいたのは、遠野山里ネットの菊池新一氏である。岩手県はもとより、東北の復興活動のキーマンになっている。多忙な菊池氏に受け入れをお願いできたのは、地域づくり全国大会石川大会や地域づくり円陣小松にゲストで来ていただいたことがあり、そのご縁があったからである。当協会の「円陣」がここでも活かされた。

やってみないと分からないことがある

やってみないと分からないことがある、ということを改めて分かったのが、この事業の評価である。

復興期に「炊き出し」は必要かとの懸念はあったが、やってみたら、炊き出しがまだまだ必要であり、炊き出しは有効であることが分かった。

現地で打ち合わせをしたわけでもなく、スタッフ全員が「救援の炊き出し」ではなく、「円陣の炊き出し（寄り合い、ふれあい、話し合いの炊き出し）」であることを直感し、のびやかに、にこやかに振る舞った。

現地の人たちとの意見交換については、参加者が女性1名だけで、広報活動が不十分であったが、こちらの意図に気づいていただけた人がいたことは、この出前円陣に可能性があり、改善の余地があることが分かった。

会場に貼り出した紙ツイッターは、書き込みが3通だけで不発に終わった。こどもたちが用意したスケッチブックでお絵描きを始めたので、役に立たなかった訳ではなかった。

これからのつながりの芽

スタッフの誰もが感じたことは、一回に終わらず、これからも東北と交流していくことの重要性である。

私自身は陸前高田市で栽培されている「気仙茶」の復興のお手伝いができないかと思い、来場者に茶畑のことなどを聞いたが、「仮設住宅に住むおばあちゃんが詳しい」との情報しか得られず、仮設住宅訪問の時間もなく、有力な手掛かりを見つけられなかった。

つながりの芽は簡単に見つかるものではなく、できれば再訪したいと考えている。

岩手県陸前高田出前円陣・遠野視察研修の自己評価

濱 博一（現地担当コーディネーター）

はじめに

今回、石川地域づくり協会の事業として企画・実施した標記被災地支援・研修には、事務局の中本課長を経て、日本航空学園から、マイクロバス・トラックおよびドライバーとして教員4名のご協力を得た。被災地での大鍋の炊き出し・参加者9名（ドライバー除く）を擁する本事業は、同学園の協力なくして成し得なかったと考えられる。冒頭に、深く感謝の意を表したい。

陸前高田市横田地区での大鍋

食材の調達

大鍋に使用する食材のうち、野菜に関しては今回仲介役をお願いした遠野が野菜の産地でもある事から現地調達とし、さらになべ用にカットを依頼した。

このため、鍋の調理に調理道具を要しないなど、被災地での炊き出しには有効であることが確認できたとともに、後方支援地区への若干でも経済効果があったものと考えられる。

調理時の交流

大鍋の調理時に、大鍋向けのすり身の投入方法に興味を持った参加者に急遽参加してもらい、一緒に調理を行った。

思いがけない交流の場ができた。現場での柔軟な対応が大切である事を学ぶことができた。

食材の量の判断

当初200食を予定していた食材は、結果的に300食分であった。仮設住宅を周回して集った被災者は30名ほどであったが、会場の横田基幹集落センターに隣接する保育園で運動会が開催されており、被災者も含まれていたため呼びかけるとともに、ボランティアセンターのスタッフなどにも提供することができ、残りもせず不足もしないという完食状態で終えることができた。

事前に把握する食材の量的な精度を上げることは、今後に向けて重要であるが、同時に用意する人数の把握も精度を向上させる必要があり、過不足は両者のバランスに依存するものである。今後の課題である。



一方、沖縄から調達した食材（塩もずく、シークァーサー、ちんすこう）も200個に小分けして手土産としたが、周知が届かず一部が残った。残った分は、「遠野まごころネット」を通じて後日、仮設住宅に届けていただくこととした。

このように、残余ができた際の再配分ルートを確保することは、善意を無駄にしないためにも重要なポイントである。

3. 陸前高田市横田地区での出前円陣

「遠野まごころネット」を通じて、事前に仮設住宅にチラシを配布・告知をしていたが当日、陸前高田市女性協議会会長の佐々木さんにご参加を頂いた。ひとりで聞くのは勿体無いと言っておられたが、被災地の状況（次節参照）を考慮すると、自分の生活のことで精一杯の時期に1名でも参加があったこと自体、評価に値すると考えられる。

既に現地入りしていただいた「遠野まごころネット」の菊池新一氏とネットワークを繋ぐことができ、現地での新たな展開が期待できると考えられる。

今後、同様の企画を立案するに際しては、タイミング（被災規模と期間）を十分に計ることが考えられるが、被災による混乱と必要とする組織の状況（経済的・心理的）、仲介組織・ネットワークの状況などにより、一概に考えられない面が多く、これらを併せて今後の課題である。いずれにせよ、これらの問題を克服するのは、現場での柔軟な対応力である。

4. 陸前高田市被災現場の視察

大鍋・出前円陣の終了後、マイクロバスのみで陸前高田市中心部の被災現場に向かった。

6月の石巻・女川への個人的な支援活動、9月上旬の地域づくりコーディネーター研修時の石巻・女川への現場視察を経験していたが、陸前高田は、さらに状況が過酷であった。

標高が低く海岸線に近い地域に市の中心部があったため、津波による被害を大きくしたと考えられる。

また、1.2mほど地盤が沈下したため、海沿いの被災地は、被災後の汀線より海側になってしまい、野球場が海中に没する（右写真）ような状況となっている。

瓦礫の多くは未処理で、大きくは分別されているようだが、山積みのままであり、被災した自動車も一箇所に固められていた。

市民の憩いの場であった数万本の松林は、ただ一本だけが残り、市民から「希望の一本松」と復興のシンボルとされてきた松も、周囲を海水が取り囲み、枯死寸前であった。



岩手県の他の被災地状況に詳しくないため推論ではあるが、より広範囲に大規模被災をした岩手県の状況の方が、宮城県よりも未だ過酷ではないかと考えられる。



5. 遠野市での視察研修

後方支援のあり方

「遠野まごころネット」の東日本大震災被災者への対応を伺った。大槌・釜石・大船渡・陸前高田のいずれからも約1時間という遠野は、過去幾度と無く繰り返される三陸の地震と津波災害に対して、常に後方支援拠点としての役割を担ってきたという。

中でも驚いたのは、被災住民に対する悉皆調査（全戸調査）であり、これによって家族構成、収入源の有無と程度などが把握された。以後、全ての支援活動がこの調査を元に組み込まれることになったという。まるで行政の仕事ではないかと思われる初動である。刻々と変わる被災者のニーズへも随時更新されるこの調査結果をベースに臨機応変に対応がなされる。物資の供給量とフェードアウトへのタイミングも同様である。

このように、仲介役を果たす組織・団体の経験・現場力の如何が、担当する被災地の状況に即反映されるため、極めて大きな役割で有る事も認識される必要がある。

被災地支援のあり方

今回、我々の大鍋出前も、イベント疲れを起している来訪の多い地区を避け、地区としては被災を免れたものの、被災者を抱え仮設住宅も並ぶ横田地区を選んだのも、彼らの現場把握力に拠る処である。

被災地へ支援に入るには、現地で被災以後定常的に活動し、現場住民・被災者と強いネットワークを持つ団体・組織を介して行うことがベストである。ただし、現地のボランティアセンターが設置されることが多い社会福祉協議会などの公的機関は、このような能力においてバラツキが大きく、仲介役を依頼する際には、十分な留意を要する。

今回の事業には、能登半島地震の際、応援を頂いた沖縄地域づくりネットワークの人脈を伝って、沖縄の酒・食材を調達し、岩手に届けた。すなわち、これまでの沖縄・岩手双方に対して顔の見える持続的な交流を活かし、つなげることができた。

日常からのコミュニケーションが被災時に命を救い、その後を救うことは、阪神淡路大震災で明らかになったが、被災地支援においても、このことは何も変わることが無い法則ともいえるのではないか。

6. 総括的評価

◎沖地ネットの支援金が現地に生かされたか

沖地ネットから能登半島地震の際に頂戴したの義捐金の使途として、今回の事業において、被災者の方々への沖縄産品（食材）の提供ならびに、旅費の一部を支援金として充てさせて頂いた。

沖縄の食材については、直前に数度沖縄を襲った台風の影響で、果物類が入手困難と

の状況から、塩もずく・シークァーサー・ちんすこう・泡盛を手配した。

このうち、前3者は食べ方のレシピを添えて200人分のお土産として現地で分配したところ、意外に多くの方がモズク・ちんすこうが好みとのことで、好評だったと考えられる。

泡盛については、大鍋提供が昼食時であったことから、現場での提供を見送り、「遠野まごころネット」に活用法を委託したため、効果は未検証である。

◎大鍋で能登の元気が現地に伝わったか

この点については、

鍋の準備に参加する方が6名程度（全体の2%）あったこと

「仮設に入居以来、きちんとした料理を食べていない」との感想

大鍋のお替りを求める人が、全体の約1割近くあったこと

お礼の言葉、能登・金沢への来訪経験を語りコミュニケーションが図られたこと

避難・仮設入居以来の再会を果たして喜び合う光景

などがみられたことから、期待通りの成果があったものと考えられる。

◎出前円陣としての成果はあったか

結果的に出前円陣への参加者は1名であったが、

事前の仮設住宅へのチラシ配布数が約120であったこと

被災者が自身の生活再建に手一杯である現地の状況

参加者からは、自分ひとりだけで聞くのは勿体無いとの感想だったこと

遠野のキーマンである菊池氏とネットワークを繋ぐことができたこと

などからすると、現実的なレベルで成果があったと考えられる。能登半島地震の復興過程に関する資料は複数部数お渡ししてきたので、今後参加された方へのフォローアップを丁寧に行うことにより、成果を確実なカタチに変えてゆくことが重要であろう。

◎塾生の現地研修が効果的だったか

研修としての正式な内容以外で、重要な学びの機会に遭遇した塾生がいたが、本人がどの程度自覚したかは、今後の行動を観察する必要がある。

「遠野まごころネット」が定常的に支援している陸前高田の農村地区区長ならびに、キーマンである菊池氏から、直接お話を伺う機会を得たことは、壮絶な現場の状況と共に、塾生の心に強く残ったものと考えられる。その程度を診るためには、彼らからの報告書の内容を精査したい。

◎今回の遠野研修の全体プログラム（日程、運営、役割分担）はベストだったか

「何を以ってベストとするのか」は難しい判断ではあるが、過去の被災・被災地支援の経験からも想像を超えていた現地の被災状況・復興遅れの現状などを考慮すると、現実的な解としては、まずまずであったのではないかと考えられる。

例えば日程的には、選択肢として挙げられていた2週間後だと、もう少し寒くなるため鍋の提供にはより効果的だったと第三者的に判断できるが、今回の日程でも隣接地の

保育園において運動会が開催されていたため、より多くの被災者・関係者の方々と出逢える幸運な機会を頂けたことの方が、意味があると考えられる。

また、一人のリーダーが牽引役になるチーム構成は、リーダー一人に過度な負荷が掛かるが、今回は複数のリーダー役がそれぞれの目配りで柔軟に対応した点があり、結果的に現場では遺漏・粗相・至らぬ点などは無かったものと考えられる。

番外編

被災支援の外部化

今回の石川ー岩手間の長い行程において車中で交換された情報は、密度が濃いものがあった。石川地域づくり協会としても、あるいは有志としてこれまでの被災経験・被災地応援の経験を集め・整理し、今後に役立てられるよう発信してゆく必要があると考えられる。

自作の家

遠野でお世話になった農家に紹介され、早朝一軒の建築中の家屋を見学した。齢70にして、一人で4年かけて建てているという。

樺林に囲まれ、周囲の環境と溶け込んだ手作りの建物。端材はすべて薪ストーブの燃料となる無駄の無い建築。百姓（多くの職業ができる人）の底力を垣間見る想いがした。



高齢化・若年層の激減などの状況に解決策が見出しにくいと考えられている山間・中山間地域の地域づくりにおいて、この方のように自力で黙々と目指すものを遂げようとする努力と意志力に、学びなおす必要がるあのではないか。

地域は、再生が困難と思われている処ほど、思い切ったゼロからの建て直しが必要なのかもしれない。

帰農

今回、お世話になった方の一人に、東邦大学大学院生の本多さんがいる。学生でありながら、「遠野まごころネット」に籍を置き、定期的に被災地支援活動をされている。

個人的に参加した石巻の支援を行っていた東京のNPO法人オン・ザ・ロードの中心的ボランティアも、やはりこのような若きボランティア達だった。そこで活躍する彼らに、働くことと労働とを切り離れた生き甲斐、瞳の輝きを見る。

若者は、今日の巨大化した社会・都市に対して何かの疑問を抱いているのかもしれない。

一方で、地元で生まれた若者から見捨てられる田舎。そこには、本来の人間らしい生き方ができるフィールドが忘れられ、眠っているのではないか。この両者をつなげることができたなら、閉塞感が根強い地方部の地域づくり活動にも新たな扉が拓かれるように感じてならない。

塾 生 報 告

「地域づくり円陣」に参加して

山 口 雅 史 (塾生)

【参加目的】

大鍋を囲んで現地の人々と対話することで、その人たちが現在感じていることや想いを引き出せるかわからないが自分なりに受け止め、これからの防災に対する意識を高めたいと思った。また「被災地へ元気を届ける」ため、大鍋と調理器具一式を持ちより被災地へ向うことにした。

【現地視察】 バスで移動中にて

ガレキの山や重ね積みされた車などが点々と配置され、前回の研修で訪れた宮崎県と同様の光景が多く見受けられたが、まだ被災直後のような状態の場所もあり岩手県の方が被災地域が大きかったのか、ガレキの撤収作業がスムーズに進んでいない様子だった。



【現地活動】 炊き出し

横田基幹集落センターに着くなり玄関口でテントを構え、外で大鍋でお湯を沸かし屋内ではお土産のモツクや「ちんすこう」などを袋詰めする作業を行った。

いよいよ大鍋の中がいい具合に炊きあがってきたころ、当日にお隣の幼稚園が運動会だったので、その人たちが一斉に傾れ込んでくる形になった。

想像していた大鍋を囲んで雑談は残念ながら出来ずに、僕らは並んでいる住民の方々に対して鍋汁を配り続けるのでやっとだった。しかし、1つの場所に各仮設住宅の人が集まったことでご近所さんと久しぶりに会えたというような場面が多々あり、このような催し物を開くだけでも意味があるのだと確信した。



【民泊】

炊き出しを終え、私たちは現地の民家で一泊させていただいた。

消防士の旦那さんとお酒づくりの大好きな奥さんがたくさんのごちそうとお話をもてなしてくれた。明るく振る舞ってくれてはいたが、震災の話が絡んでくると時折、口調が弱弱しくなったりと現地の人だけが感じる強い想いが感じられた。

【参加したことで】

被災地へ実際訪れてみることによって、普段整った環境に浸かり過ぎているためテレビの光景を見ても映画のように現実味が薄まってしまっていたが、被災地に来ると五感で感じているため震災の爪痕をみることによって「出来事」という安易な意識から「起こりえる恐怖」へと急に意識が引っ張られた気がした。

また大学生ボランティアが復興支援に本当に積極的な姿を見て、僕らのような若者が加わることで変わることがあるのだという期待と意識が同時に芽生えた。



共に生きるということ～絆～

木村孔明（塾生）

1、はじめに（参加動機など）

私は地域づくり塾の塾生として、遠野研修に参加させていただいたわけであるが、参加を決めたのは、出発の一週間程前だった。どうしても参加する意図が理解できず、本当に現地に行って炊き出しをすることが、現地の方々のためになるのか、ただの自己満足なのではないかという考えを持っていたため、参加を躊躇っていた。

参加を決めた理由は、今の被災地に行ってお手伝いできるのは今しかなく、また、このメンバーで参加できることなど生涯ないことだろうと思ったからである。

なお、私にとっては、被災地に行くのは今回が初めてというわけではなく、個人的に、ボランティアで一度、また地域づくりコーディネーター研修会にて一度、計二回訪れている。ボランティアを通して、被災した現場の現状、ボランティア作業の大変さ、注意点等を、また、コーディネーター研修会では、こういった現場で活動する方々の取り組みを学ぶことができた。地域の現状を自分の目で見ることで、体験すること、お話を聞き学ぶことで、被災地がとても遠い場所とは思えなくなってきた。

そして、今回、コーディネーター研修会でお話をお伺いした、遠野まごころネットの菊池氏と関わらせていただき、座学と現場が結びついたように感じている。

（実際は体験が先で、後日、自分なりに研修会のお話を整理したからである。）

2、活動内容

活動の経緯や内容等は、既にコーディネーターの皆様方が記述されているとおりなので、自分なりに、今回の活動を通して感じたこと課題に思ったこと等を記載することとする。

（1）炊き出し（横田コミュニティセンターにて）

遠野まごころネット及び横田のコミセンの方のご好意により、この地で炊き出しをさせていただくことができた。鍋の準備、お土産の準備にそれぞれ持ち場につき、無心で作業をおこなった。それらの段取りのよさや、臨機応変に対応できたことで、炊き出しの開始時間に間に合うと同時に、地域の方に不快感を与えずに済んだように思う。





左の写真は、地域の方と一緒に鍋作りをしている様子である。大湯氏が七尾の漁師から聞いてきた、つみれの作り方を、現地の方がやってみたくてということで実現した。現地の方は楽しく生き生きと作られ、振る舞い鍋をする前に地域の方と我らよそ者との距離が縮まったように思う。

右の写真は、振る舞い鍋をしている様子である。中本課長の呼びかけに応じ、隣の幼稚園で運動会をしていた児童とその保護者の方々が押し寄せ、長い列となっている。

一人ひとりに、輪島塗の箸の説明と温かい鍋を振舞った。子どもから大人まで、「美味しい、おかわり」というお声を本当にたくさんいただいた。心から参加してよかったと感じた。



(2) 現場把握（陸前高田にて）

振る舞い鍋が終わり、片付けをした後で、まごころネットの菊池氏の案内により、陸前高田に向かった。前回の研修でも思ったが、現場近くに行くまでは、巨大な震災があったことを疑うくらい、平穏な風景であった。しかし、陸前高田市内に入るに連れ、その悲惨な現場を知ることになる。バスの車内で震災前の写真を見せてもらったが、そこには確かに家があるのに、窓の外には何もない。代わりにあるのは、瓦礫だけであった。

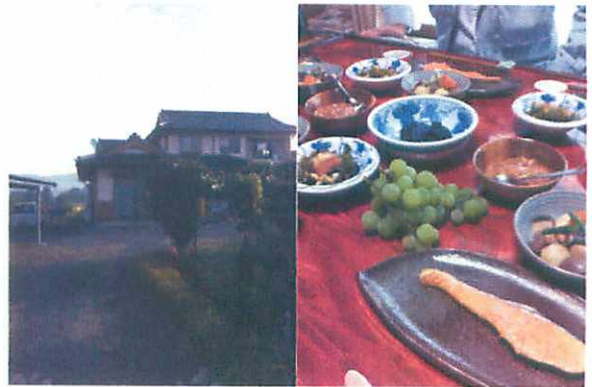
また、この土地で、地域交流の拠点の東屋を作る団体の方とお会いした。塩分で駄目になったこの土地に再び人が訪れることを祈ってのことであった。この土地で復興を目指した取り組みをされている方々の力になれることを考える必要があると感じた。



(3) 宿泊（遠野民泊）

宿泊は遠野であったため、町自体は平穏であった。しかし、ご夫婦のお話をお伺いすると、今回の震災で陸前高田や南三陸町から避難した方々から、その悲惨な状況の話を聞いたとのことである。

震災の悲惨さとそれを乗り越え、平穏に暮らしている方々の強さを感じた。



3、研修を終えて（思うこと）

今回の研修を通じて、一番感じたことは、このつながりは一度きりで終わらせてはいけないということである。何かあるにつけ、こういった方々を思い出し、継続的に支援していくことが必要である。例えば、石川県には、地域づくりに精通したコーディネーターの方々がたくさんおられ、かつその方々の多くは能登半島地震を経験し、その復興に携わった方々である。そういった方々のノウハウを被災地に伝えることがまず大事である。また、地域づくり塾を座学だけにせず、被災地復興を塾生の現場実習課題とし、コーディネーターの方々と被災地に行く仕組みにしてはどうか。また、今回ネットワークが構築されたことを機に、これからも継続的に交流をし、皆で助け合うという気持ちを持ち続けることが大切である。

前回の研修会でも記載したが、今回の震災を機に、「絆」というもの深く認識させられたように思う。地域の絆、日本の絆、人類の絆というように、レベルがいくつもあると思うが、そういったものが、生きていくうえで大切であることをこれからも認識しながら、自分のできることをやってまいりたい。

ス タ ッ フ 報 告

中 本 利 光（総括補佐、石川県地域振興課長）

石川県地域づくり協会による東日本大震災被災地支援の取組にあたっては、赤須さんをはじめ各位が現地との連絡調整や支援内容の詰め、物資調達等に動いて頂き、更には取組の趣旨に賛同して頂きました日本航空学園、中能登町、県奥能登総合事務所の理解・協力のお陰もあって実現することができました。

今回の活動を振り返ってまず思うことは、運営委員やコーディネーターの皆さんが、それぞれ独自のフィールドを持って活発に活動をされているにもかかわらず、今回の企画・連絡調整・諸準備の労をしっかりと引き受けて頂き、実現に漕ぎ着けることができたこと、それ自体を評価したいと思います。各位が長年にわたり協会の運営・事業実施に関わっていただいている中で培ってきた風通しの良い人間関係や信頼関係があればこそ出来たものだと誇りに思います。

今回、遠野市と陸前高田市への出前円陣・視察研修では、現地の方々の心情をはかりかねる中、「遠野まごころネット」の菊池新一さんの導きがあったお陰で、横田地区の皆さんが『こんな大変な時はお互い様という思いで、私たちは石川県からやってまいりました。どうぞ気軽にお食べください。』と声掛ける我々に、何の警戒心を抱くことなく、自然な流れで我々の食事提供を受け入れていただき、『ありがとうございます。』『あったかくておいしかったです。』『遠いところから誠にありがとうございます。』『〇年前、能登へ行きましたよ。石川へ行きましたよ。』といった数々のお礼の言葉を頂くことができました。仕込み量と提供量がピッチリとなったことも含め、これこそ想定外と言ってもよい達成感や充実感、喜び、そして「絆」を感じることができました。

大なべ提供や円陣を終えた後、菊池さんの案内でバスで移動しながら海辺の市街地を見させて頂いた時は、破壊されたままの鉄道の軌道、手つかずのガレキ、まるで古代遺跡のように建物の基礎だけがひろがる市街地、地盤沈下で海水に侵されている市街地、失われた松原、・・・、車窓から移りゆく被災現場の姿を眺めながら、私の思考は停止してしまい、復旧・復興をどのように展開していけばいいのだろうか、見当がつかない、そんな思いが壊れたレコードのように空回りするだけでした。

圧倒的な破壊力を目の前にして為すすべなく、尊いあまたの生命や営々と築き上げてきた財産や地域社会を奪われ、叩きのめされ痛めつけられたダメージは計り知れませんが、私達一人ひとりに心のありようとか絆の大切さを改めて気付かせてくれた、というのがせめてもの慰めであります。しかしながら、今回、日本人全体が気付かされた心のありようとか絆を大切に思う気持ちが、長く続くであろう復旧・復興という膨大な取り組みを支えていく、最も大切な精神的支柱になるものと思います。

今回の体験を踏まえ、協会として、あるいは石川県として、何らかの形で継続的に関われないものか、当初予算編成作業の中でトライしてみたい。

出前円陣プロジェクトの検証

大 湯 章 吉 (サポーター、運営委員)

今回の研修目的は①沖地ネットの支援金を有効に活用する(沖地ネットの能登復興の思いを、復興の途にある能登から東日本の復興へと、思いのリレーを繋げる)②石川の培った円陣の手法で東日本震災復興に役立てる③沖縄、能登、東北の間で継続的に人や物が交流できるシカケをつくる④能登の震災復興の経験を被災地に伝える④「遠野まごころネット」の後方支援活動を学び、地域づくり活動での災害復旧・復興対策を考える⑤地域づくり塾生のスキルアップに繋げる一であった。また、災害から半年が経過し、仮設住宅に移転した後で⑥大鍋を振る舞うことが現地に受け入れられるのか⑦炊き出しのイメージで終わらないか—の不安があった。

<それぞれ目的別に検証すると>

①沖地ネットの支援金を有効に活用したか

支援金が元金(切っ掛け)になり陸前高田市横田地区の出前円陣が開催できたのであり、支援金がなかったらプロジェクトは企画されなかった。支援金が被災地の能登だけに使われた場合は、沖縄と能登(石川)の両県の関係に止まっていた。岩手県(陸前高田)の復興として活用したことで地域づくりの関係が広がった。また、沖縄の産品に「石川の思いと沖縄の思い」を重ね合わせ届けることができた。石川地域づくり協会にとって有効に活用したが、沖縄にとって有効かどうかは判断できない。だからこそ、この成果を沖縄の人に伝えることが重要である。

②石川の培った円陣の手法で東日本震災復興に役立てたか

大鍋を食した後、被災者を交えた出前円陣の開催を企画したが、殆どの方が帰り、参加されたのは陸前高田市の佐々木女性協議会長(前会長が被災され、新たに就任)1名であった。参加者が1名であっても、出掛けたメンバーと「遠野まごころネット」の菊池氏、本多氏を交えながらミニ円陣を開いた。佐々木さんからは「能登の復興の道程を知りたい」「陸前高田市の復興をどう進めたら良いか」「陸前高田の商工会議所の皆と円陣の手法を使った復興会議を開催してほしい」など、地元の抱える課題や希望が出された。地元の要請が無い中で、こちらから一方的に円陣の出前を実施することには無理があった。チラシ案内も「遠野まごころネット」の本多氏に丸投げし、本多氏の判断で仮設住宅の被災者へポスティングしたのみで動員要請はしなかった。現場対応とすればベストの判断である。出前円陣は、出掛けたメンバー自身が現地や移動バスの中で分科会として学びあえる機会になった。ただ、大鍋を囲んで円陣(人の囲い)ができ、いたるところで寄り合いや語り処が生まれて、我々は円陣の場、舞台を提供ができたのではないかと思う。

出前円陣を開催するには、現地のニーズを把握し、十分な準備が必要である。しかし、後方支援として被災地を支援している「遠野まごころネット」がしっかりと機能しているところでは、我々の持ち込み企画で一時的な成果を生み出すより、後

方支援をしている「遠野まごころネット」を支援することが震災復興に役立つと思われた。今後、菊池氏達からの要請で、何時でも石川のノウハウを提供・支援できる体制をつくっておくことが重要であろう。

③ 沖縄、能登、東北の間で継続的に人や物が交流できるシカケをつくったか

沖縄、能登、東北（陸前高田横田地区）との結びつきを意識したが、沖縄からの土産を渡しただけでは沖縄と陸前高田の関係は弱い。我々が横田の人と顔を合わせ、会話しながら大鍋を提供できたからこそ横田地区の人と能登（石川）の関係が深まった。当たり前のことだが、人同士は直接に対面しなければ関係は深まらない。しかし、「遠野まごころネット」の菊池氏を始め関係者が間に入ったことで沖縄・能登・遠野（陸前高田）の今後に繋がる可能性が高い。集まっていたいただいた方は、沖縄の「もずく、シークァワサー、ちんすこ」の土産に違和感がなく素直に喜んでくれた。継続的な人と物の交流するシカケづくりには至らなかったが、沖縄と陸前高田横田地区の物を通した「復興の思い」の架け橋になったと思われる。

④ 「遠野まごころネット」の後方支援活動を学び、地域づくり活動での災害復旧・復興対策を考えたか

「遠野まごころネット」の菊池氏から後方支援の活動内容について報告を受けた。

遠野市は釜石市、陸前高田市、大槌町、大船渡市と1時間圏内に位置し、過去から津波災害の後方支援の拠点を担ってきた。震災発生前から、遠野市の団体が連携し「遠野まごころネット」を立ち上げ、支援体制に取り組んできた。そして、震災発生直後から「行政では行き届かない、行政ではできない部分」を担ってきている。情報では現地のタイムリーな道路事情、ガソリン事情、食糧事情などについて全体や個別の情報を更新しながら発信している。物資の供給・配送については、独自に被災者のニーズ調査票（4,300軒）を収集し、個別のきめ細やかなニーズに応えている。配送も地元雇用によりの確な配送と双方向の情報交換を実施。「ほっとひといき事業」では、被災者を被災の少なかった遠野市に受け入れ、入浴や食事、滞在プログラムを実施している。復興への動きとして、被災者の仕事づくり（まけないぞう作り等）を支援している。仮設に移ると行政の支援が終了する中、遠野まごころネットは、必要な支援を続けながら理想の町づくりに向かって被災者とイコールパートナーとして歩いていくとのことである。

遠野まごころネットの活動報告から、自然災害を想定して「後方支援の在り方や域内団体との連携と役割分担」等について今から対応すべきであると感じた。

<地域づくり活動での災害復旧・復興対策>

ア、自然災害を予測し、被災地と後方支援地域を想定する

（それぞれの地域は被災地と後方支援の2面性を持つ。）

イ、地域づくり団体の特性を活かし、連携と役割分担を決めておく

(行政の行き届かない部分(かゆい所を搔けるきめ細やかな支援、コミュニケーションツール、地域言語と読解力)を基本に活動を展開する。専門的知識者を前線へ送る。また、外国人のネットの把握や誘導等。)

ウ、地域づくり活動の中に災害を想定した連携、訓練を取り込んでいく

(意思決定、情報受発信、指揮系統についての疑似体験し実践向きにする。)

エ、復興へのプロセスづくり

(地域づくり団体のノウハウ(ネットワーク)を最大に活かし復興へのプロセスづくりを展開する。)

オ、被災者と行政のパイプ役

(声無き声を行政に伝える。被災者の本音を代弁する。)

<行政の新たな取り組み課題>

ア、被災地の行政職員のバックアップ体制を充実させる。

(被災地の復旧の殆どは被災職員自らが担当しているが、疲労・心労で冷静で的確な判断・行動ができない場合が多い。その結果、2次災害、復旧の遅れに繋がる恐れがある。3日以内に現地職員の業務を引き継ぎ、支障をきたさないよう周辺市町村や県職員が派遣される体制をつくる。そのための日頃の業務連携体制を整備しておく。)

イ、被災者ニーズの把握

(被災地域、被災者によりニーズが異なる。ニーズ調査については、遠野まごころネットが独自で調査をしているが、個人情報であることから行政でやるべき仕事である。きめ細やかな対応や個別対応は民間に任せる。)

ウ、支援物資の統一化

(被災地には全国から様々な支援物資が届く。しかし、現地では仕分け作業や受け入れ場所、物資の供給バランスに多くの問題が発生している。(洗濯されていない衣類などがかなり含まれている)そこで、予め必要な物資リストをつくり、製造メーカーと協定(支払いは援助金を充当)を結び供給するシステムをつくる。家庭にとって最小限必要な用品を入れた家族セットが役だっている。)

エ、被災地への情報伝達

(停電し光ファイバーやADSL回線が寸断された被災地には、情報が入らない。対策本部や避難場所に今起きている災害情報を伝える手段を整備する。)

オ、緊急宣言令を発動

(壊滅的な被災地に緊急宣言令を発動し、超法規措置がとれるようにする。炊き出しの保健衛生法、臨時設備設置にかかる農振、農地法、建築基準法など通常時の法の適用外を宣言でき、現場指揮対応を可能にする。)

カ、新しい情報の受発信

(刻一刻と変化する情報(全体エリアと小エリア)を発信、受信するシステムを構築する。)

キ、被災地周辺市町村で一時避難できる民泊、宿泊施設を登録

(避難場所は過酷で3日程度の対応が限界である。周辺地域で食事、風呂、安眠ができる受け入れ箇所を日頃から準備する。民家では事前に登録、ホテル等は協定を結ぶ)

ク、後方支援する民間団体の支援

(資金力の無い民間団体へ資金や物資、人を送りだし支援する)

⑤地域づくり塾生のスキルアップに繋げる

遠野での研修は、仙台で開催された「地域づくりコーディネーター研修会」に続いてのもので、被災現場や復旧・復興過程を直接見ながら被災者と向き合うことができ、続けて参加した塾生にとって言い表せない体験になったと思われる。自分の目で見て、聞いて、確かめて、触れて、感じる中から、それぞれの地域づくり活動の中に活かすことができるのである。きっとスキルアップに繋がったのではないか。

⑥大鍋を振る舞うことが現地に受け入れられるのか

すり身を入れた大鍋は、被災者や横田地区の皆さんに素直に喜んでいただけた。横田地区は支援の手があまり入らず、仮設住宅の被災者と被害の無い人が混住している地域。おかわりの度に、ついつい「ありがとうございます」とお礼の言葉が出てしまう。私達が逆に元気をもらったような不思議な感覚になってしまう。「芋煮」でコミュニケーションを育んできた土地柄なのかもしれない。大鍋を食しながら、被災の状況や家族の不幸、過酷な避難所暮らし、将来の不安を語っていただいた。全身を指差し「靴下から下着、この服全部、皆さんからいただいたもの。とても感謝しています」と語っていただいた。大鍋を囲んだことで、心を開いていただけたと思う。この地域にとって大鍋は、コミュニケーションを深め合う場として、とても良い企画であった。

⑦炊き出しのイメージで終わらないか

炊き出しとは被災された方が食するもので、今回の大鍋は炊き出しにしなかった事で横田地区の住民や保育園の運動会に参加された保護者や園児も仮設住宅の被災者と一緒に違和感無く食していただいた。とは言え、形は炊き出しそのものである。喜んで食べていただいている姿に、炊き出しか、そうでは無いのか違いを詮索することは、あまり意味の無いことであることがわかった。イメージはどうであれ、ひとつの行動を起こすことで、次々と波紋が広がるように、新たな展開が始まりつつあるのは事実である。「また、鍋を囲んで楽しくやりたいね」と目を細めて話してくれた横田地区の皆さんに、心の中で「また、大鍋を持ってここに来たい」と叫んでいた自分がある。それぞれが、一つの行動の中から、色々な思いが芽生え、次の展開に繋がっていくものと感じた。

心を運び、心を暖めた大鍋

高名雅弘（大鍋担当、運営委員）

私は、5月上旬に宮城県名取市に派遣されて以来の東北の被災地に向かう機会を得ることができました。

震災から、早や半年以上が過ぎているため、被災地はかなり復旧が進んでいるのではないかと思っていましたが陸前高田市の被災地は、今なお瓦礫が積み重なり、わが目を疑うばかりの光景が広がっていました。

特に、海岸附近では行方不明の捜索が続けられており、少しでも手がかりを探そうとする警察関係者の皆様方の姿が見られました。

そして、海岸から離れたところでも、津波の塩害により杉が立ち枯れしており、こんな所まで津波の被害があったのかと、改めて驚きました。

そうした被災地ではありましたが、少しずつ立ち上がろうとする姿も見え、水産加工工場も大規模な施設が建設されているとともに、地域の方々とボランティアとで、立ち枯れの杉を利用して地域の施設の建設を自らの手で始められるなど、槌音が響きわたる光景がありました。

こうした、槌音が地域を元気付けるとともに、地域で考え、地域で取り組む姿に、改めて地域づくりの原点を感じることができました。

今回、私たちは大鍋を運び、能登の香りと元気を被災地に届けようとして計画したのですが、この事業を実施するに際して、まずは、日本航空学園輪島校の先生方に大変お世話になりました。

日本航空学園輪島校の先生方のご支援がなければ、この事業は出来なかったと感じております。

そして、岩手県遠野市の皆様、陸前高田市の皆様のご支援がなければ、この事業は出来ませんでした。

そして、今回参加したメンバーの一致団結がなければ、この事業は出来ませんでした。

そして、残念ながら今回は参加できませんでしたが、応援してくださいました地域づくり協会のメンバーや地域づくり塾生の応援がなければ、この事業が出来ませんでした。

こうした、大勢の皆様の支援や応援が、大鍋を東北に運び入れることが出来たのだと感じています。

今回の大鍋は、計画を実行することにより、偶然の出会いや機会を得ることができました。

このことは、大勢の皆様の気持ちや心を大鍋に入れて被災地に届けることが出来たと感じています。

一杯一杯配られたお碗を通して、被災地の皆様方と話し、笑い、癒し、癒されたのではないかと感じています。

遠野・陸前高田を訪問して

事務局 白井晴基

○参加の経緯

今回の訪問は、石川地域づくり協会が能登半島地震で沖縄から寄せられた善意を東日本大震災の支援に役立て、沖縄から能登へ、さらに東北へとつなぐ事業として、長年地域づくりに携わってこられたコーディネーター・運営委員の方々の思いが結実する機会であり、かつ、地域づくり塾の研修の一環と位置付けられていた。このため、十分な参加があれば、私自身は留守番役でよいのではとの考えもあった。

一方、東日本大震災に対しては、職場から派遣やボランティアで現地へ赴く者がいる中、どのような形で自分が関わっていけるのかを考えさせられていた。

そんな中、協会から参加を呼びかけた結果、現地での作業に足りるかどうかという人数に留まったのを見て、参加を決めたのであり、現地で何に出会い、大鍋による出前円陣がどのような形になるか予測もつかないまま、自らのものとなって迫ってくる事となった。

○出発まで

参加を決めた後は、大鍋づくりと円陣の段取りが役割分担に沿って進められていたものの、自分なりにできることはないかを考えるとともに、現地・遠野で活動しているボランティアや「まごころネット」について、事前に情報を集めることに努めた。今回の活動が、被災地へ押しかけて、善意を押し付ける「おせっかい」にならないのか、また、訪れる側の自己満足に終わらないのかということも考えた。

訪問先が陸前高田の横田地区と決まった後は、ネットの情報で、既に地区の中学校や小学校の仮設住宅に対して、東京からのボランティアグループが企業の協力・協賛も得て、炊き出しだけではない支援企画を開催していたこともわかり、「鍋だけでいいのか」という不安を感じることもあった。

そうした中、現地での動きを想像し、テントやバスに付けるプロジェクトの表示や能登半島地震の状況を紹介する貼紙などを準備した。

○現地での動きと思い

早朝に岩手に入り、午前8時頃、「遠野山・里・暮らしネットワーク」で東洋大学の院生・本多俊貴さんの出迎えを受けた。会議室に、我々を迎え入れて一人でお茶を入れて運んでくる姿に、長く現地で活動している人の気配りを感じた。

産地直売所「かみごう」でカットされた野菜などの食材を積み込み、横田基幹集落センター（コミセン）で、テントを設営し、大鍋の準備にとりかかった。

私は、事前の打合せで仮設住宅への迎えのバスでの添乗を申し出ていたもので、会場の大鍋準備で十分に手伝う時間もなくバスに乗り込むこととなったが、この経験が鍋を振る舞ったとき以上に印象に残ることとなった。

バスは、本多さんがあらかじめチラシを配っていた、堂の沢、三日市、狩集（かりあつめ）の仮設住宅を順次まわっていった。1か所目の堂の沢は、やや小高い坂の途中、二段になった平地に1棟5軒ぐらいの仮設住宅が6棟ほど建っていた。チラシで知らせた時間までバスを停めて待ったが、誰も乗ってこなかったが、一軒一軒まわって呼び出すような場面ではないと考え、バスを出した。2か所目の三日市は更に小規模で、ちょっと坂を上った場所に2棟の仮設が建ち、ここで70歳を過ぎたと思われる白髪の女性が乗りこんでこられた。出歩くには不便そうな場所だったので、買い物はどうされているかと尋ねたら、新しく買ったバイクで、スーパーの仮店舗まで行っていると答えられ、続けて、「バイクも、じいちゃんも流されてしまったから...」と話された。私は、とっさに返事ができず、言葉を探すうちに次の仮設に着き、すぐに数人が乗りこんでこられた。

私にとっては、このときに見た仮設住宅と女性の言葉が、震災の悲しさを最も感じさせたものであり、せめて「おじいちゃんのみまで長生きしてください。」ぐらいの言葉を返せばよかったと思っている。

あのような土地に建てられた仮設住宅で、これから冬を迎え、寒さをしのぎ、その部屋の中で、亡くなった人に語りかけていく姿は、想像するだけでも悲しい。

自家用車で会場に向かう人もいるとのことで、バスは数人を乗せただけで会場に戻り、皆さんを降ろしてから、大鍋の手伝いに加わった。容器に盛って出す作業に専念したが、そこで掛けられた「ありがとう」、「おいしかった」の声は、ここへ来てよかったと思うに十分であった。

陸前高田の被災地の視察については、何もかもが流された土地と、かろうじて残ったビル、うず高く積まれたガレキの山を目の当たりにした。ガレキの山は、能登半島地震の際にも輪島のマリンタウンに出現して長期間片付かなかったことを思うと、これらがきれいに片付くまで気が遠くなるような時間を要するだろうと推測させた。

○活動を終えて

大鍋による出前円陣、被災地の視察、農家民泊での交流は、東日本大震災との関わりがこれで終わりではなく、次に私たちにできることは何かという問いを残した。できるならば、再び現地を訪れ、同様に、又は違う形で何かできないのかを考えるが、度々訪れるには遠すぎ、かつ、経費もかかる。

仮設住宅が小規模で、入居する人も抽選によっており、住んでいた地域もバラバラであることを思うと、現地で活動を続ける方々も十分想定されていることではあろうが、入居者が孤立することなく、人のつながりを保って生活していくことを願うばかりである。そして、私たちの活動もこれで終わりではなく、後方支援の後方支援という形をとるなどして、できることを探さないといけないと思う。

また、支援だけでなく、活動で得た見聞と想いをまわりに伝えていくことも大切な役割と思う。単に「被災地へ行ってきたよ」というレベルでなく、そこで感じた思い

を家や職場や出会う人に語ることに、すぐに私たちができる次の行動ではないか。

○反省

今回、事務局としては、手探りの部分もあったとは言え、もっと積極的に関わられる部分もあったのではないかと考えている。地域づくり協会の活動自体、コーディネーターと運営委員の方々が主体であり、事務局は一步退いている感じがあるが、その立場にあっても、準備に隙間がないか、あるいは、こうしことも必要ではといった、想像力を働かせた、無駄に終わるかもしれない準備があってもいいと考える。

今回を省みても、例えば、

- (1) 沖縄から能登に対する支援を岩手につないだ、との思いが現地の方々に十分伝わったのか。チラシや現地での設営を通じて、なぜ沖縄のものが一緒に配られているのかは伝えられたのか。現地で伝える準備や説明をすればよかったと考えている。
- (2) 仮設住宅に対する呼びかけでも、私たちの思いをしっかりと伝えられるものがあればよかったのではないか。本多さん手作りのチラシの投げ込みは、十分有難いものであった。本来ならば事務局で案を作成し、配布をお願いすることも考えられたのであり、なぜそこに行くのか、なぜ大鍋なのかを説明し、能登半島地震を説明する資料の作成まで、大湯さんらの手によったことはお恥ずかしい限りである。
- (3) 地域づくり塾のプログラムとして、図らずも同じ月に二度も東北へ研修に出ることになったとは言え、当初から予定されていた研修に塾生の参加が2名に留まったことは残念に思う。先の仙台での研修で、次に何か機会があれば何かしなければという意識は塾生には生まれなかったのだろうか。事務局として、もう少し働きかけをすべきではなかったかと思っている。

以上、考えるところはあるものの、今回の研修は、事前の準備、大鍋の振る舞い、本多さんや菊池さんからの説明と協力、被災地の光景、農家民泊での交流、バス車中のやりとり、多くが私にとって意味のある出来事であった。

現地に向けて東北道を走るバスの中、出前円陣の紙ツイッターで、もし自分に順番が回ってきたら何を書こうかを考えた。偶然ある曲が流れて、その一節が耳に残り、それを書こうと決めた。書く機会はなかったが、そのフレーズは現実になった。

「目の前に広がる世界に意味のないものは一つもない。」という一節である。

最後に、今回の取組みに向けて、お忙しい中、調整と準備をしていただき、企画力・実行力を示してくださったコーディネーター・運営委員の方々、現地でご案内、協力していただいた皆さん、バス、トラックを夜通し運転していただいた日本航空学園の先生方に心からお礼を申し上げたい。ありがとうございました。

「地域づくり円陣」出前プロジェクトに参加して

事務局 山本 一彦

今回の地域づくり協会の取り組みに参加させていただく形で、東日本大地震後の東北地方にはじめて訪れる機会をいただいたことに感謝します。

「地域づくり円陣」出前プロジェクトが実行できたのは、沖地ネットからの支援金、日本航空学園からの車両等の提供、岩手県遠野市の「遠野まごころネット」の菊池新一と本協会とのこれまでの繋がり、協会コーディネーターや運営委員の奉仕的な努力があったからこそ実施できたものと考えております。

今回のプロジェクトの総括や評価・検証は赤須コーディネーター、濱コーディネーター、大湯運営委員により行われておりますので、事務局として参加した私の「①地域づくり協会ができること」「②被災地との継続的な支援について」の個人的な感想を少しだけ書かせていただきます。

① 地域づくり協会ができること

陸前高田市での出前円陣の際に女性協議会の佐々木さんからは、仮設住宅に住むことになった避難住民と元から住んでいる横田地区住民との融和が大きな課題となっているが、どうすればよいか分からないという言葉が非常に強く印象に残りました。

女性協議会や商工会など何かを行動しないといけないと思っている人や団体がいるのに、どうしてよいか分からないため行動できていないというのは、地域のことにについてとことん話し合うノウハウ、人と人がつながるきっかけがないためだと感じました。石川地域づくり協会のコーディネーターや運営委員の皆さんは平成19年の能登半島地震の際には「震災復興から持続可能な地域づくりへ」という地域づくりシンポジウムを開催した実績と経験があります。被災地では市役所などの行政も大きな傷を受けており、行政頼みではなく、ノウハウを持つ地域づくり協会のような民間団体からの支援が非常に重要だと思いました。本協会が持つ地域づくりのノウハウを地元の地域団体へ提供し、交流の輪をつなげていくことが、今後の被災地での地域づくり、ひいてはまちづくりにつながるものと思いました。

② 被災地との継続的な支援について

今回の振る舞い大鍋では、食べながら能登や石川とご自身のつながりを涙ながらに話してくれる方もおり、鍋の提供は地域の方と話をする契機としてたいへん有効でした。ただ、今回のプロジェクトに参加した誰もが感じたように、これを1度きりにすることなく、継続的に現地に行ったほうが住民の方々とも、もっといろいろな話ができたり、人と人の絆が強まる可能性が高いと思います。このため、石川地域づくり協会として年間に数回程度は被災地に出向かける仕組みの検討が必要だと感じました。